

母校の状況

最近の進路状況

進路課長 土井 正純

完全週五日制に伴い平成十四年四月に導入された土曜補習に始まり、学力向上プロジェクトハイスクール事業、Sクラスの編制など、本校のさらなる活性化を目指して取り組んできた様々な施策が実を結びつつある。そこで、進路的な側面から最近の本校の状況を報告いたします。

平成十五年のSクラス発足当初から今年卒業まですべてが順調であったわけではなく、先の見通しが暗い時期もあった。ただ、どんな時にも「明るい未来がきっと来る」ことを信じて、関係者の努力は続けられた。結果的には、昨年度を上回る結果を残すことができた。特に、医学部を含めた難関大（旧帝大）の合格数が四十八、国公立大合格数が百七十四と昨年の最高値を更新した。好結果に結びついた第一の要因は、「受験は団体戦」という意識が貫かれたことである。Sクラス以外の難関大合格数も二十四という高い数値を記録し、どのクラスの生徒も最後まで頑張り抜いたことが実証された。第二に、受験科目を安易に減らさなかったことである。五教科七科目を勉強するのは、やる気がある人ほど大変である。しかも今年からは英語リスニングテストまで課され、全国的には、夏休み明けに受験科目を減らす人が急増した。そのような中で目標を落とすことなく努力を続けたことが好結果を生んだのだと思う。『週間朝日』に進学率全国第一位として取り上げられたのも決して偶然の産物ではない。第三は、補講の出席率が極めて高かったことである。二次対策小論文指導など二月に入ってから熱心に先生方に食らいついていた人が多く、粘り強い学習が実を結んだと言えよう。

さて、「団塊の世代の大量退職」を来年に控え、知識と経験の引継ぎが我が国の大きな課題である。と同時に、少子化に伴って大学・短大の志願者数が入学者数と一致する「大学全入時代」も当初の予測より二年早まり来年には突入すると言われている。先行き不透明な時代であるからこそ、本校が担う役割はあまりにも大きい。大学への明確なビジョンが必要である。大学は通過点であってゴールではない。そして、大学で培った学問を生かして、基礎研究に身を捧げたり、次の時代を担う人材を育てたり、地域の活性化に尽くしたりするなど、いろいろな分野で活躍してもらいたいと願う。本校の生徒は、学校行事や部活動に全力投入した経験が豊富である。したがって、将来しっかりとした基盤を持ち、社会に対しても多大な貢献ができる人間に成長できるように育てたい。

最後に、本校のさらなる発展を願うとともに、同窓会の皆様にも今まで同様温かいご支援をお願いいたします。

部活のある風景

教頭 奥山 和弘(46回)

六月某日。今日は午後から雨。放課後の校舎は運動部の活動場所となる。一棟と二棟の間の通路には陸上部、一棟と二棟とテニス部も走っている。各教室には野球部、練習後、机を直すのも手慣れたものだ。旧体育館の男子バスケット部。軽快な動きが見える。図書館前では女子バスケット部がアップをしている。今日もよく声が出ているのは新体の男女バレー部。男女バドミントン部員の動きは意外と激しい。プールから水泳部（水球部）の音が響く。今年も新入部員が大勢入り、ますます練習に力が入る。天気の良い日は、図書館前の中庭に山岳部のテントが広がる。格技場の柔道部は入部多数、剣道部は部員不足に耐えられず、これ頭張っている。弓道部も弓道場で日々練習だ。

千南原会館の音楽部。朝から自主練の音が聞こえる。茶華道部はお手前の練習だ。英語部はALTのグレイス先生と一緒にクッキーを作っている。学校紹介ビデオ制作、行事での放送と大活躍の放送部。校内外の喧嘩をよそに、黙々と学校新聞の制作をする新聞部と同じ部室で部誌制作に余念がない文芸部。部室で練習するギター部。JRCと写真部はそれぞれ今年部員が入り、廃部の危機を乗り越えた。詰め甚や詰め将棋の勉強をする棋道部。美術部の巨大絵画は文化祭で注目を集めた。毎週、古文書を読み解く歴史部。地学部は天文観測に加え研究を始めた。黙々とパソコンに向かう電子部は、文化祭のロボット展示も好評だった。たつたひとりの生物部員も地道に活動している。旧体育館の舞台では、喧々囂々よりよい舞台にしようとする演劇部が遅くまで粘っている。

文武両道を日々実践している後輩達。これからは頑張ってください。

山岳部東海大会準優勝

三年連続県優勝の山岳部は、惜しくも県準優勝。卓球男子団体は県3位と健闘。この他三段跳び本多君、テニスの福住さんが東海大会に出場。山岳部は東海大会で準優勝と健闘した。水球は昨年に続き今年も準優勝となり、東海大会出場が決まった。

平成十八年度県大会出場の内訳

- 山岳部 ●水泳部 ●卓球部 ●陸上部 ●サッカー部 ●男子バスケット部 ●男子バレー部 ●女子バレー部 ●男子テニス部 ●女子テニス部 ●柔道 ●弓道 ●放送部 ●棋道部



「三十六回目的「夢祭」

新体育館での「夢祭」の表彰式に向かう途中、旧体育館を覗いてみた。すでに人の姿はなく、消し忘れた天井の照明に、深緑のシートの上に並んだパイプ椅子だけが銀色に光っていた。数時間前ここで繰り広げられた熱狂が、まさしく「夢」と映る。結果発表。第三位、第二位、そして第一位。そのたびに起こる悲鳴にも似た歓声や嘆息が、二十分の創作劇に賭けた三年生たちの思いの深さを物語っていた。

この「夢の祭典」が誕生したのは、昭和四十六年である。それまでの映画の上映会が、各クラス（三年生だけではない）及び有志による「かくし芸大会」へと生まれ変わったのだ。当時二年生だった私は、いわば歴史の転換点に立ち会ったことになる。しかし、当初は、にわかに関わり当たらなかった。時間をどう消化するか、皆苦慮していたようだ。むりやり代表にされた生徒の独唱などというクラスもあった。また、そのころの千南祭は、秋に、文化祭と体育大会とがセットになった三日間連続の行事として行われていたため、体育祭のデコレーション制作と「夢の祭典」とに、スタッフは二分されるが多かった。

今年見た三十六回目的「夢祭」は、予想以上のものへと進化していた。「かくし芸」は三年生の創作劇へと絞られ、クラスが一つになって完成度を競う一大イベントとなっていた。幕間にパロディCMを映し出すのが近年の流れだそうだが、今年は映像の使い方も磨きがかかり、舞台場面までのあらずじやエピソードなどを映画のように編集して見せていた。

それだけではない。蓮華寺池公園での練習を夜八時まで認めて教員が交替で見守り、CMには校長までも登場してコミカルな演技を披露するほどの全面的なバックアップ体制がとられている。そういえば、五月に入り、職員室で飛び交うようになった「ゆめさい」という言葉には、何やら憧れめいた情熱の響きがあったような気がする。「徳」とはね、楽しむことのできる能力のことです」とは中島敦の小説に出てくる言葉だが、生徒たちからも、またそれを支える教職員からも、同じくそうした「徳」が感じられた。今日の学校教育において、この「徳」は貴重だ。

「夢祭」三十六年の歴史の中で、生徒と教職員が一緒になって行事を築き上げてきた「学校文化」を、はぐくんでくださったことに、同窓の一人として敬意を表したいと思う。



OB通信

「まこと会」は毎年一回

我々13回生は昭和11年に入学。担任はA組が入江、尾崎、山崎先生、B組は天野先生でした。

一年生の夏、浜松高工近県蹴球大会で見事に優勝し、藤枝の町を提灯行列で祝った。又ベルリン五輪も開催され、笹野積次、松永両先輩がサッカーで活躍し、後に母校講堂で報告講演会が行われ、感銘を受けた。在校中は日中戦争が泥沼化し、学園は軍事色濃くなり、勤労奉仕も盛んに行われ、瀬戸川河川敷（現志太河川敷公園）の開墾にも出かけた。

昭和16年0名が卒業。その年12月に大戦に突入し、後、殆どの友が、職場から、進学した学舎から陸海軍に入隊、戦地に赴いたり本土防衛に務めたりした。身を挺して戦火に散った者、餓えと病に斃れた友等々20名を失った終戦となった。

戦後数年して同期の会「誠至会」が発足。後に「まこと会」と改称、現在に至っている。以来、必ず毎年同期会を開き、その間の節目の年には特別な事業を企画し、準備委員会を設けて、遠隔地の会員にも参加を呼びかけ、恩師にも出席をお願いして、盛大に開催して来た。主なものは次のとおりである。

- 第1回物故者慰霊祭(昭35) 藤枝市最林寺
- 20周年記念会(昭36) 母校会議室 記念植樹
- (現校庭北東隅くすの木健在)
- 30周年記念会(昭46) 藤枝市営グラウンドにて藤枝スポーツ少年団とサッカー試合
- 第2回慰霊祭(昭50) 最林寺に慰霊碑を安置
- 40周年記念会(昭56) 写真集「めぐりあい」(A4判62頁) 発行 奇跡的に全員参加
- 50周年記念会(平3) ビデオテープ「まこと会」制作
- 第3回慰霊のつどい(平9) 最林寺
- 60周年記念会(平13) 同窓会会館 校庭の記念樹の傍に記念碑建立、母校振興の寄金

現在も、毎年一回の会は欠かさず開催して旧交を温めているが、年齢を越えて、さすがに逝去される会員も多く、本年4月現在、会員数は40名となっている。

会発足以来、会長を置かず、すべての会は地元委員数名が中心となり、準備会を重ねて運営している。

本年も秋にまこと会を、藤枝市で開催する予定である。



どなたか……NPOの事務局長をやりませんか。

堀田 一牛(32回)

私は、昭和34年卒です。慶応大学に進み都市社会学を専攻しました。学生時代の大きな縁で知り合った他大学出身の方々、総合デザイン事務所を設立し、企業や自治体から受託した情報デザイン、建築設計、商品デザイン、まちづくり基本計画等の仕事を40年間やってきました。東京を拠点にしたこれらの活動(仕事)は変化に富み、挑戦的な性格もあり、面白いものでしたが、自分自身のラストワーク(最後の暮らし)は、故郷に帰ってふるさとでの地域活性化、まちづくり、これまでの体験を活かして役に立つてみたいものだと考えるようになりました。この思いの芽生えは、50才頃からです。

そこで、61才を迎えた4年前に単身、藤枝に帰り、とくにお茶の流通・生産に係わる方々にご提案し、お茶とまちづくりを目的とする特定非営利活動法人を県庁に申請し、設立しました。役員15人のうち6人の方が東高OBです。

今年の4月で丸3年が経ちました。活動テーマも、山のお茶づくり応援、歴史的市街地の再生、大井川流域の交流人口づくり、という3大目的が明確になってきたように思います。少しずつですが、行政や産業界や市民各層との連携も生まれ、活動も具体化し忙しくなってきました。従って、日常の事務局業務もふえてきました。そんなことから、NPO法人の継続と発展を考えると東高OBからの人材探しをやるうと思いつきました。

企業をリタイヤし、ふるさと(志太・榛原)に帰った方、帰ろうと考えている方でNPO活動に興味を持つ方に、どなたか事務局のリーダーとしてやってくださる方はいませんか。ぜひご連絡ください。お気軽にご連絡いただけます。私どもの活動の様子を伝えるHPを覗いてみていただければ幸いです。お会いして、もう少し詳しくご案内したいと思っております。

特定非営利活動法人 藤枝・お茶事の村
ホームページ / http://ochajeblog.jp
Eメール / ochaji@ainc.ne.jp
〒426-0025 藤枝市藤枝1-9-1
TEL 054-(646)0085
TEL 054-(646)0085
TEL 054-(646)0086

町づくりの助っ人

藤枝・お茶事の村

〒426-0025 藤枝市藤枝1-9-1
TEL 054-(646)0085
TEL 054-(646)0086
E-mail ochaji@ainc.ne.jp

お茶人と人をつなぐインターフェイス

お茶の産地を、ボランティアしていただませんか

お茶の産地を、ボランティアしていただませんか

お茶の産地を、ボランティアしていただませんか

推薦図書

「サッカー静岡事始め」

サッカー名門校、志太中―藤枝東高は、大正十三年の創立時からサッカーを「校技」と定めた輝かしい伝統を持つ。これは初代校長、錦織兵三郎氏の「体育振興、精神作興の両面に最適」との強い信念によるものだった。同十五年四月にサッカー部が誕生した後の「初出場で全国制覇」「各大会で優勝に次ぐ優勝」「戦時下もサッカーの灯は消さず」という目覚ましい実績は卒業生たちが知る通りだ。

静岡新聞社がこのほど出版した静岡新書『サッカー静岡事始め』が、そうした志太中サッカーの草創期から第二次大戦直後までの軌跡、特に大きな試合の出場メンバーやスコアなどの記録を含めた活躍を詳しく紹介している。

昭和十一年のペルリン五輪に志太中からは松永行、笹野積次氏というOB二人の名選手を送り出したが、この五輪の試合にも一章さいいて、様子がよく分かる。本書は志太中をはじめとする県内サッカー名門校の歩みを描いた読物。定価税込830円。全国の書店、インターネット書店で扱っている。問い合わせは静岡新聞社出版局 TEL054(284)1666へ。



支部総会・同期会・同窓会の開催案内

各支部の総会及び同期会・同級会の開催が、次のとおり予定されています。日頃なかなか会う機会が少ないことと思っております。旧交を温める機会としては是非とも、同窓生お誘い合わせのうえご参加をお待ちしております。なお、次回発行版でも同様の案内欄を設定しますので、開催情報の提供を同窓会事務局までお願い申し上げます。

- 大井川支部の総会案内
 - 開催日時 平成18年8月6日(日)
 - 開催場所 大井川町役場多目的ホール
 - 会費 六千円
 - 問合せ先 伊藤勇男054(622)0152
- 第40回生の同期会案内
 - 開催日時 平成18年9月24日(日)
 - 開催場所 小杉苑(藤枝市)
 - 会費 七千円
 - 問合せ先 同期会事務局 (各務)
- 第31回生の同期会案内
 - 開催日時 平成18年9月30日(土)15時
 - 開催場所 藤枝エミナス(藤枝市)
 - 会費 一万円
 - 問合せ先 藤枝エミナス事務局
- 浜松支部藤枝東高・遠江地区同窓会
 - 開催日時 平成18年10月10日(火)18時
 - 開催場所 浜松名鉄ホテル
 - 会費 七千円
 - 問合せ先 大塚義郎 (西遠製菓株)

TEL 054(542)0301